新修 芦屋市史

総説

芦屋の自然環境　芦屋市は阪神地域のほぼ中間に位置し、大阪湾を見下す六甲山地の南側に、まとまりのよい市域を占めている。山を負い、海に臨む本市の地形環境と、晴天の多い気候とは、ともに風光明媚な住宅都市として発展するのに重要な要素となっている。

市域の地盤は、背山が花崗岩および古生層の固い岩盤からなり、山麓から海岸へかけての台地や低地は、洪積層および沖積層の米凝固の地層からなっている。このような芦屋の土地の誕生は、遠く地質時代古生代の昔にさかのぼる。すなわち、古生代の後半、今から約三億年昔のころ、現在の日本列島の大部分の地域は広い海底であって、そこに堆積した地層が古生代末に地殻変動をうけて陸地となり、日本のほぼ全域が大きな山地となったとき、芦屋地方もはじめて陸地として出現した。お多福山付近の硬い岩石（古生層）がそのような、もっとも起源の古い岩石である。その後、中生代に入って、花崗岩が芦屋地方の地下一帯に広く逆入（いり）し、地盤の上昇にともなって表面の古生層は次第に失われ、やがて内部の花崗岩が広く地表に露出するようになった。

新生代鮮新世の終りの頃から、芦屋から大阪湾にかけての地方は沈降して古大阪湖が生じ、やがて海水が侵入

して瀬戸内海の一部となり、海底に新しい地層が堆積していった。その後、洪積世の中ごろから、六甲山地の隆起がはげしくなり、背山の六甲山地が形成されるとともに、山麓の部分も、その影響をうけて海底の地層が陸化し、やがて台地に成長した。この頃は、世界的に氷河時代で知られ、海面が低下して日本は大陸と陸続きになり、大陸から象が渡来したのである。芦有道路で発見されたナウマン象の化石は、そのことを物語っている。また洪積世の遺物と推測されているブレイド類が朝日ケ丘地区から検出され、大阪湾沿岸における最古の人類が当地域にも存在した可能性が考えられている。

沖積世の初めのころ、気候が温暖化するとともに、大阪湾の海面は今よりも約五メートル高く、海岸線は、ほぼ阪神電車線付近であったと推定されている。その後、わずかに海退があって現在の海岸低地が誕生した。

原始・古代　日本列島成立後に出現したといわれる縄文文化期に入ると、朝日ケ丘地区を中心に縄文前期の遺跡・遺物が検出されて、狩猟民が主となった生活の場が存在したことが推測されている。

しかし、その後の縄文人の動向は明確ではなく、数千年の空白の期間をおいて、西暦紀元前後の弥生中期の時期になってふたたび芦屋の地域に人類の生活文化の遺構をみることができる。山頂式高地性遺跡として著名な会下山遺跡に代表される祭祀的・軍事的性格の強い集落遺跡などをあげることができる。弥生時代の青銅器としては大阪湾沿岸にとくに顕著に分布している銅鐸をあげることができるが、楠町堂ノ上からも流水文銅鐸が発見されている。銅鐸を所持することのできた有力者の居住地であったことを物語るものである。

古代国家が成立したと推定されている四世紀以降になると、打出地区には中期古墳が、三条町から六麓荘地区

にかけては後期群集古墳が営造されている。しかも、古墳出土品のなかには、陳孝然作の中国製の鏡、陶棺・竈形土器・垂飾付らしい耳飾など珍貴なものが含まれていて、地域的特色が注意されている。また、奈良時代前期にまでさかのぼりうるといわれる芦屋廃寺址が検出されている。文献面でも行基が船息院と尼院を建立したという記事や法隆寺領が存在したらしいという記録がまず目につく。西国への交通上の要衝であることは地形的にも推測されていることであるが、「芦屋駅十二疋」と記録されているように、芦屋駅が設けられ、十二疋の馬をおいていたことが知られている。当然のことながら西国への往来の貴顕に因んだ文学遺跡の伝承ものこされており、古歌にも王朝貴族たちによって芦屋の風光の美が詠まれている。中央政界からはうとんぜられたといわれている阿保親王とその子在原業平の伝承が伝えられ、市内には阿保親王陵が遺存している。

中　世　平穏無事な貴顕の隠棲の地のごとく思われる芦屋の地も、その立地条件のゆえに、平安時代末期以降近世初頭にかけては激動の政治事情にからみ落着かない有様であった。

当地方には鎌倉時代中ごろに葦屋庄が存在し、葦屋姓を名乗る一族が大名主（だいみょうしゅ）として勢力を有していたようである。元冦の役の異国調伏の祈禱において著名な大和西大寺の思円上人叡尊は弘安八年（一二八五）に葦屋氏宅に泊し、住民に菩薩戒を授けている。このころ金国的に社会秩序に抗する風潮が顕われ、摂津国内にもその例が多く、東大寺・興福寺の管下兵庫関の騒擾事件には打出を本貫とする後藤ら三名が参加している。

南北朝時代、当地方は戦乱の巷となり、元弘三年（一三三三）閏二月の鎌倉幕府に属する京都六波羅の大軍と播磨を地盤とする赤松円心の統率する軍勢との合戦、延元元年（一三三六）二月の楠本正成らが足利尊氏軍を破

った打出・西宮浜の戦、観応二年（一三五一）二月の足利尊氏・直義の打出浜合戦などは著名である。

相つぐ戦乱は室町幕府の時期を迎えても一時的な安定を除いては治まらず、将軍と大名の対立争乱、世情不安からくる下剋上・郷惣村形成の風潮は度を増した。この動きを反映して、従来から当地方に設置されていた諸荘園、長講堂領葦屋荘、大光明寺領葦屋荘、北野社領芦屋荘、神祇伯家領芦屋などは、多く不知行の相を呈し、在地土豪・国侍・被官などの進出が著しかった。将軍継嗣問題に端を発した応仁の乱は、管領と守護大名の抗争・内訌となり管領細川氏の内紛はいわゆる足軽大名河原林正頼らの奔走により一層激化した。芦屋の鷹尾城・西宮の越水城の動きが当地方をしきりと刺戟し、中央の権門たちの関心を惹きつけた。

戦国末期には三好長慶の勢力は五畿内を制したが、このころ天文二十四年（一五五五）の芦屋庄持山東西十八町をめぐって、東の西宮社家郷・西の本庄と芦屋庄民との間に起こった山論は長期にわたった。庄民が挙げて三好長慶の居城芥川へ逃散したともいい伝えられ、永禄三年（一五六〇）冬に長慶の家臣松永久秀の斡旋により五年ののち帰村したのは歴史的な大事件であった。

近　世　織田信長・豊臣秀吉によりようやく戦国の乱れは整い、秀吉は大坂城を築造したが、その際に属将たちに令し、城石を各地から集めさせた。芦屋地方からも多数の切出しを強制している。のち徳川氏が改築の際に行なった採石の印刻石で市域に現存するものが多い。

徳川家康に政権が移って近世封建社会制度は確立した。芦屋・打出・三条・津知の四か村は尼崎藩領に属し、戸田氏の支配下にあったが、のち芦屋村は領主が青山氏・松平氏に移り、明和六年（一七六九）には芦屋・打出

両村は、尼崎藩領から徳川氏直轄支配（天領）となり、明治の廃藩におよんだ。

村政は地方三役である庄屋・牛寄・百姓代を中心として運営され、代官や郡奉行の指示に従った。自治共同体の生活の維持・推進のために早く戦国期のころから村の掟を定め、山林・水利の分配利用をめぐる対立の解決に当てた。新田の開発も初期の間に小規模ながら山麓などにおいて進められ、出作・入作に関して時にはげしい訴訟がつづけられることもあった。

西宮社家郷と芦屋・打出村との山論は、寛保二年（一七四二）にいたり再燃したが、寛延三年（一七五〇）にいたり両村の勝訴をもって終止符が打たれた。

芦屋川の流水は、灌漑用水として古来近隣にわたって活用された。分水の日割りを関係各村（＝井組）において合議して定めているが、土質が保水に適当でないため、早魃ごとに共同体内の上・下村間に対立が生じ、大庄屋をはじめ村役人たちの奔走によって解決の途が講じられた。芦屋地域が水不足からともかくも救われるのは猿丸安時の奥山池の開さく、元治二年（一八六五）の新溜池の完成の時をまたなければならなかった。芦屋川の水を利用して絞油・精粉・精米を行なうのに水車を使用しているが、その設置・廃除に関してたびたび紛争を生じているのも、このような事情が深刻にからんでいたのである。

四か村とも、元祿ごろから階層分化現象が漸進し、株からはずれてゆく者も増加し、農間稼ぎとして、男子は油屋・日雇・酒頭司などに出かけ、女子は木綿織などで補いをしていた。文化年間ごろに摂津・河内・和泉の国国農村の多くを渦中にまきこんだ「国訴」という封建社会下における訴訟行動の因が、疲弊した農村構造の破壊

を防ぐために肥料価格の抑制、菜種作物など換金農作物の自由売買を要求することにあったことは、先進地域の農民の切なる事情をもっとも具体的に示したものであった。

幕末の世情不安の時期には大阪・兵庫間の要衝にある当地はとりわけ多くの助郷を要求され、西宮駅所に動員（出銀）されて一層疲弊にみまわれた。また開国前夜、ロシヤ船が大阪湾に入航してくるにおよんで警備のため打出に陣屋がおかれ、打出浜に寄港・出船する各藩兵の通過点として時の動向の中に立たされ、さらに神戸における「神戸事件」の発生もいち早く伝えられた。

近　代　明治時代の開幕とともに新政府は版籍奉還・席藩置県や地租改正など相ついで新施策の推進をはかった。明治四年（一八七一）には天領であった芦屋村・打出村も、旧尼崎藩領であった三条村・津知村も幕藩制下をはなれ、一様に兵庫県管下に属した。また学制発布によってはやくも明治五年、芦屋小学校・打出小学校の開設をみた。

明治二十一年（一八八八）市制、町村制が公布され、翌二十二年に芦屋村・三条村・津知村・打出村を合併して新たに精道村が誕生した。この年は大日本帝国憲法が発布された年でもあった。以来日本の資本主義社会構造の拡充するにともない、大阪・神戸の二大都市が発達したが、芦屋の地は大都市近郊の環境にめぐまれた最適の住宅地として着目され、それまで精道村の産業の中軸を形成していた農業は著しい変貌後退をとげた。大正から昭和にかけては、交通機関の発達とともに芦屋川を中心とした住宅街の形成へと転換し、流入人口の急激な増加にともない生活環境の改善整備が相ついで行なわれて今日の国際文化住宅都市芦屋の基盤が築かれていった。

この間、昭和九・十三年の両度の大風水害のため甚大な被害を受けたが、この被災をも飛躍への一つの転機としてとらえ、いっそう自治精神の刷新をはかるべく市制施行に向けて諸準備を進めた。昭和十五年十一月十日にいたり人口約四万二千人・戸数八千余戸を擁する精道村は一躍して芦屋市となったのである。

現　代　翌昭和十六年（一九四一）太平洋戦争が始まってから、芦屋市勢にも影響が現われ、諸事業の計画も変更を余儀なくされた。市民生活も消費生活における統制、増税賦課、国債消化の割当強化、軍事訓練の強制、防空演習の頻繁な実施、出征兵士の送迎・慰問、食糧・燃料の生産増強への参加、就業職種の転換など、戦局の苛烈化にともない大きく変化していった。昭和二十年の数次にわたる空襲により他の阪神間諸都市と同様に甚大な被害をうけ、多くの犠牲者を出した。

同年八月の終戦とともに、市当局はまず焼失した四割の住宅と、八割を失った学校の再建復興、および市民の食生活の確保に全力を傾注した。占領軍の家屋接収、相つぐ旧制度の改廃などは市民に敗戦の苦しみを味わせたが、戦災都市指定による復興土地区画整理事業の推進、住宅その他の施策遂行などの努力は、ジェーン台風の被害、自治消防・警察署の設置、物価変動などによる市財政の極度の窮迫にもかかわらず、周辺諸地域との合併構想のうちから「芦屋国際文化住宅都市建設」の方向をうち出し、昭和二十六年三月に同法の公布を実現させ、以後内容の充実に努力を払っている。

昭和二十五年の市教育委員会設置後の約十年間は開発と建設のうちにすぎた。学校はじめ芦屋病院開設、霊園建設、清掃中継所が完工した。三十一年には国民体育大会が兵庫県で開催された際、本市では庭球、ピストル競

技が行なわれた。しかし三十一年からは従来の復興建設のため累積した赤字財政の克服のため財政再建団体指定をうけいれたが、緊縮予算の執行につとめた結果、三十五年度から解除となった。この期間に推進した浜手・北部・中部各土地区画整理事業の成果として流入人口は急増し、人口密度や重心は移動し、町別人口は北西部は減少、東北部方面は急増現象を示している。商業圏に変化を生じ、産業構造にも脱皮現象が顕著になった。昭和三十五年には新市庁舎が竣工し、翌三十六年には米国モンテベロ市と姉妹都市提携を締結した。

以後「住みたくなる芦屋」への飛躍をめざし、福祉事業・環境整備に力が注がれた。市民憲章・市民文化賞の制定、安全都市宣言、隣保館・市民会館・各地区集会所の建設、福祉センター・老人ホーム・文教施設の増設、奥山貯水池の建設が進んだ。昭和四十四年実施の「高度地区指定」は本市のユニークな性格を一層前進させたものである。

阪神広域圏行政施策として推進される海岸埋立をはじめとする諸建設事業と、これにともなう各種公害によって、ともすれば失われがちな芦屋市の個性は、「公園都市」の構想を早急に実現することにより維持できるであろう。